

# 図書だより No.1

令和2年1月31日号

図書委員の「おすすめ本」をこれから数回にわたって「図書だより」として皆さんに紹介します。中には図書室には置いていない本もありますが、読書の折の参考にしてください。

## 私のおすすめ本

「鬼滅の刃（きめつのやいば）」<sup>ごとうげ こよはる</sup>吾峠 呼世晴 作



食品科学科2年 八木橋めい子

私がお薦めする本は、「鬼滅の刃」という漫画で作者の吾峠呼世晴さんによる、大正時代を舞台としたフィクション作品だ。この本と出会ったのは、この春にアニメ化されたこの作品の原作を読みたいと思ったのがきっかけだった。

この物語は、家族とともに山でつつましくも幸せな日々を送っていた、兄弟想いで心優しい少年、主人公炭治郎の身に起こる衝撃的な悲劇から始まる。ある日、町に炭を売りに出かけた墨次郎が山へ戻ると、家族は「鬼」に襲われ血だまりの中で絶命していた。その中で唯一、一命を取り留めていた妹、禰豆子は「鬼」になってしまっていた。しかし、鬼でありながらも人間の頃の優しい心を保ったままであるという、とても不思議なことが起こり、鬼と化した禰豆子を人間に戻す方法を探すべく、戦う姿を描いたものである。

私はこの時点でこれ以上ないような最悪の展開で始まったのに驚いたし、これほどつらいことが起こってしまって以上、この先どうなるかが

全く想像がつかなくて、とても不安だった。

舞台が大正時代の日本であり、開国と文明開化から半世紀近くが経っていて、和の中に洋が混在している。都市部は発展しているが、地方は前時代の名残が色濃く残ったままである。また、科学文明の進んだ大正時代に「夜に潜む鬼などいるわけがない」などの理由により、政府非公認の部隊、「鬼殺隊」は表立った行動に制限があり、苦勞している。その他にも現実の大正時代の土地も描かれたりしているのが現実味を出している。

妹を救うべく、この「鬼殺隊」に入隊した炭治郎が妹を守り、戦う姿はとても感動できるものだと思う。また、炭治郎は仲間思いでもあり、人を思いやる気持ちがとても強いので、読んでいるだけで心が温かくなるような一面もある。

作品全体の特徴としては、絵柄や雰囲気、笑いどころなど、あらゆる面で独特なユニークさがあると思う。また、名のある他の漫画家にも「日本の美学を描いている」と言われるほど、残酷でもあるが日本人らしい心や少し儂いような美しさも描かれていて、見ていて飽きることがない作品だと思う。

登場人物たちに注目して見てみると、炭治郎をはじめとして登場人物たちも一人一人が個性的で楽しめるし、性格も喜怒哀楽がはっきりした人物から、表情からは心情がわかりづらい人物もいて、そこがまた人間らしい一面でもあり、読者に親しみを持ってもらえる理由の一つであるともいえると思う。人間関係はシリアスな要素もありながらコメディ要素もしっかりあり、そのメリハリがまた物語を面白くさせていると思う。また、辛い展開になるとコメディ要素がある時との差で、より辛く感じるようになっているのだと思った。このような他にはないような魅力もあって、今では国内の累計発行部数が2500万部も突破している。私はこのことに納得させられたし、これからもっと人気が出て伸びていくに違いないと思った。

この作品は、少年漫画ではあるが生死を身近に描いていて、誰が読んでも心に響くと思う。大切な人を想う気持ちや絶対に諦めない心などの必要性が、それぞれの過去や死を通して伝わってくる。生きることの大切さや命の儂さを伝える以上に、誰もが幸せを願うのに叶わない苦しさをどのようにして自分なりに変えていくかで未来が決まるのだということ強く伝えたいのかもしれないと思った。

私たちが生きていくうえで学ぶべきことを深く考えさせられるので、私はこの本をお薦めする。